<table>
<tr><td colspan="3">団体名</td><td>特定非営利活動法人　シニアのための市民ネットワーク仙台
（略称：シニアネット仙台）（宮城県仙台市）
http://www.sendai-senior.org/</td></tr>
<tr><td rowspan="4">団体の概要</td><td colspan="2">活動開始年</td><td>西暦　1995 年　 8 月　活動開始
西暦　1999 年　10 月　特定非営利活動法人格取得</td></tr>
<tr><td rowspan="2">メンバー</td><td>人数</td><td>＜役員数＞　7 名　　＜事務局スタッフ数＞　4 名（有給 4 名）
（スタッフが責任を持って会を運営するために、全員有給にしている）
＜ボランティア数＞　130 名（会員中）　　＜賛助会員数＞　2 名
＜その他＞　会員数 380 名</td></tr>
<tr><td>構成</td><td>定年退職者、子育て後の主婦（会員中 65 歳以上が半数）</td></tr>
<tr><td colspan="2">予算規模</td><td>平成１３年度概算
･収入　\39,250,000
･支出　\38,700,000</td></tr>
<tr><td colspan="3">団体の目的</td><td>長い人生経験と豊かな知識を備えたシニア世代を社会の貴重な人材･人的資源として捉え、その活力を社会に生かすために、あらゆる世代の人々と共に手を携えて、生きがい、社会福祉、まちづくり等の実践や政策提言などに関する事業を行い、シニア世代にふさわしい活動の場を創造し、活力に満ちた豊かな新しい高齢者社会を構築すること。</td></tr>
</table>

①ボランティア活動の概要

シニア世代に必要な情報を発信し、人との出会い、活動の機会、活動拠点を構築し、「行くところがある・会う人がいる・することがある」を合言葉に、自分で出来ることを助け合い、学び合い、ふれあい活動を展開している。主な活動は下記の通り。

･ふれあいデイホームのボランティア
･病院インフォメーションボランティア
･生活支援ボランティア
･高齢者と視覚障害者へのＰＣ支援ボランティア
･観光ガイドボランティア
･各種教室講師ボランティア
･シニアランチクラブ
･麻雀会議運営ボランティア
･シニア世代のためのメーリングリスト運営ボランティア
･サロン運営ボランティア（仙台市内に活動の拠点として「サロンわい・わい一番町」を開設している）

ボランティアの募集は、会報・ホームページでの掲載、地元新聞掲載、ＮＰＯ情報誌・ホームページ掲載、社会福祉協議会情報誌掲載、市内各施設へのチラシ備置、口コミによる。

②ボランティア活動を立ち上げた経緯

シニアネット仙台は、地元新聞社のキャンペーン連載記事に共鳴した約 130 人が発起人になり、立ち上げた。そして、高齢化社会のニーズを模索していく中で、(1) ふれあいデイホーム、(2) 配食サービス、(3) 病院インフォメーションボランティア、(4) サロン運営、(5) ＰＣ支援と次々ボランティア活動や生きがいづくりに取り組んできた。会員それぞれが自分のこれまで培ってきた得意分野で活動しており、今後も推進していく。

会員は好きな活動に参加することができ、新しい活動の立ち上げも、「この指とまれ」で３人以上集まれば可能である。役目が終わったり、人気が無くなって解散したグループもある。

配食サービスは、現在ではすっかり地域に定着し、平成 14 年度よりシニアネット仙台から自立して活動している。ふれあいデイホームも、平成 15 年度から独立することになっている。独立した団体とは友好関係を築いている。例えば、配食サービスについては、車での送迎やパソコンでの会計管理等で「シニアネット仙台」が協力している。ボランティアの紹介もしている。

③活動を継続するための工夫

資金獲得の工夫として、サロンでの各種教室を活発にし、参加料を受益者負担としている。また、活動拠点がある商店街との共同イベント（七夕祭り・バザー等）や、独自イベント（コンサート・絵画展示販売等）の開催によって資金を獲得している。サロンでのコーヒーや手作り作品の販売も、大切な資金源となっている。

ボランティアのスキルアップのために、研修会や勉強会を開催している。

また、シニアネット仙台の活動が高齢社会にいかに必要か情報発信を続けている。

④ボランティア活動を行う上での困難点や課題

資金調達と情報発信に苦労した。

ふれあいデイホームと配食サービスは、経費のかかる事業であり、先導的事業として仙台市の助成金を得ることと、日本財団等から各種助成を受けることで立ち上げることができた。ＰＣ支援についても、各種助成金制度を利用して対応してきた。サロン運営については、スタッフはボランティアで対応できるが、家賃 20 万円の捻出が問題となっている。現在は入居しているビルのオーナーからの支援を受けている（家賃は相場の 3 分の 1)。

資金面で活用した支援としては、上記の他に、後援会からの寄付、シニアネット仙台会員からの寄付がある。各種助成金は継続的なものではないので、経済的に自立を図らなければならないが、なかなか困難である。そのため、自立運営を確実にするための収益事業開発が今後の課題である。

地元紙への掲載は情報面での支援となっている。今後は種々メディア（特にインターネッ

ト・ホームページ）による情報発信の充実が課題である。

また、空き店舗、空き教室などの施設提供の支援が欲しい。家賃に苦労するエネルギーをボランティア活動にまわしたい。

今後の課題としては上記の他、より多くの賛同者の発掘、他団体との協働（昨年 9 月から取り組み始めた「移動サービス・ネットワーク宮城」の立ち上げ)、新しいボランティア活動の開発、視覚障害者のためのＰＣ支援の充実、現在のインターネットによる日米交流をアジア地域にまで広げること、ボランティアコーディネーターの育成などがある。

＜活動の拠点である「サロンわい・わい一番町」＞

(団体事務局長によるレポート、団体資料より作成)

＜事例のポイント①＞　活動拠点の場所を確保し、それを舞台に様々な活動を展開

シニアネット仙台は活動拠点となる「サロンわい・わい一番町」を持っており、それを舞台に様々な活動が展開されている。

活動の多様性は、団体の求心力を削ぎかねないものだが、拠点となる場所を持つことで、メンバー間の交流や情報交換が容易となり、団体としてのまとまりが維持できると考えられる。

＜事例のポイント②＞　参加者の自発性を尊重して多彩に活動を展開

シニアネット仙台における活動は、参加する会員の関心と知識や経験を活かして多岐にわたっており、新しい活動も希望者が 3 人以上集まれば始めることが可能である。

このように会員の自発性を尊重する団体運営は、ボランティア団体として非常に重要である。シニアネット仙台の場合は、これにより活動の多様性を産むことにもなり、自発性尊重とあいまって、誰もが参加しやすい団体づくりに成功しているといえる。

また、新しい活動が生まれやすいだけでなく、役目が終わったり人気がなくなった活動についてはグループが解散しており、団体内の新陳代謝が活発であることも特徴である。

＜事例のポイント③＞　活動が発展する中で、独立していく活動もあり

多彩な活動を生み出しているシニアネット仙台からは、配食サービスのように独立した活動も生まれており、シニアネット仙台が社会的に重要な活動をインキュベーションしているとも言える。こうした組織のダイナミズムは、時代と共に変遷する社会の課題に対応していくために不可欠なものである。

また、ボランティア団体が行っている活動の一部が独立する動きを示すような場合には、その後の人間関係等に影響がないように、内部で十分な話し合いをしていくよう、助言してくことが求められる場合もある。そうすれば、シニアネット仙台のように、独立した団体と友好関係に基づいたネットワークを保っていくことが可能になる。

＜事例のポイント④＞　様々な社会的支援を活用

シニアネット仙台は経費のかかる事業にも多数取り組んでおり、行政や財団からの資金支援を活用している。

また、情報発信の面では、独自の会報やホームページだけでなく、地元の新聞や NPO の情報誌・ホームページ等も活用している。地元の新聞などに取りあげてもらうことは、団体の知名度を上げ、会員の励みになるという意味でも重要である。

ボランティア団体等の支援にあたっては、活動にみあった資金や情報などを提供する行政、企業、助成財団や基金等の社会資源を紹介していくことも重要である。